

三段階評定 A 目標を十分に達成し、成果を上げている
B 目標を概ね達成している
C 目標を十分に達成しておらず、改善が必要である。

区分	目標	実施目標	担当	事業実績	評 定	
					三段階評定	評 定 意 見(まとめ)
1 収集 保存	①優れた写真・映像メディア作品を適宜適切に収集する。	ア 現在都の収集予算が凍結されており、当面は価値が高く優れた作品で海外流出を防ぐことや、新進作家・中堅作家の代表的作品を収集するという目的により、写真美術振興会計を用い、応急的措置として作品を購入する。	企画係	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度は、「東京都収蔵委員会」を終了後、写真・映像文化振興事業特別会計により、作品・資料の購入を行い、東京都へ寄贈した。 購入した作品・資料は、以下のとおりである。穂苅三寿雄作品20点、瀬戸正人作品20点、尾仲浩二作品20点、山内道雄作品20点、フェリックス・ナダール作品8点、アントニオ・ベアト1冊(100点)、ダン・ワイナー7点、ブルース・デヴィッドソン8点、ジェローム・リープリング1点、シドニー・カーナー1点、以上合計205点。 	A 15/16年度=A	<ul style="list-style-type: none"> 写真美術館が作品・資料を積極的に購入する姿勢を示すことは、作品の持つ歴史的・文化的・芸術的価値を世間に広くアピールすることに繋がる有意義な事である。(過去に貴重な文化財の海外流失や損傷が多くあった。) 写真史上の重要作品・資料を調査・研究することにより、体系的収集を図ることが望ましい。今後ともコレクションをさらに充実させ、館の活動と研究に役立てるよう努められたい。 購入実績の周知は重要である。さらに新たに購入した作品や資料をまとめて公開、展示し、作品の重要性やコレクションに入れる意義を説明する機会があるとよいのではないか。
		イ 貴重な作品寄贈の申し出があれば、東京都収蔵委員会の議を経て、寄贈を受ける。		<ul style="list-style-type: none"> 学芸員が寄贈者宅で作品の実見など調査した結果、4名の方より、国内写真作品・資料208点、海外映像作品1点、合計209点の作品の寄贈を受けた。 寄贈作品の内訳は、以下のとおりである。佐久間兵衛作品198点、佐久間兵衛関連写真資料1式、矢野修二作品4点、黒河内(推定)作品2点、以上合計205点。写真新文1冊。撮影者不祥の作品2点。Wブラッドフォード・ペナリー映像作品1点。 		A 16年度=A 15年度=B

1 収集 保存	②作品を永く後世に伝えるために適正に作品を管理するための手立てを講じる。	ア 作品、資料の適正な保存のために温度・湿度・照明・空気汚染等の影響を研究し、収蔵品管理条件を整備するとともに、劣化の危機にある作品の修復を行う。	企画係	<ul style="list-style-type: none"> ・アルバム ファーイースト2点の修復を行った。 ・額縁の改善処理1点を行った。額に写真を密閉した作品であり、写真がガラスに密着していたが、額から取り出せるように改善した。 ・革製収納ケース、紙製収納ケース各1点の修理を行った。革製ケースは、木蓋の折れと底部の天枠の外れを修復した。紙製収納ケースは、糊劣化による紙の浮き上がりを改善した。 ・ダゲレオタイプ2点、ティンタイプ1点のガラスの交換と周囲のシーリングを施した。 	<p>B</p> <p>16年度=B 15年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的業務として継続性が必要である。今後もより一層の取り組みが望まれる。 ・収蔵品管理条件、保存環境を整備し、劣化して修復を要する作品を適切に修復したり、保護処理が施されている。 ・今後は収蔵品の状態、保存環境についての情報・問題点の共有化や、修復すべき作品の長期的・短期的修復目標を設定し、計画的に対応されたい。
		イ 展示されている作品が傷まない様に適切な環境条件の管理を行う。	企画係	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度も継続して、保存科学研究所員による月一度の展示室内の環境モニタリングを実施した。また、作品管理の観点から展示毎に照度測定を行った。 ・作品管理担当職員と保存科学研究所員による協力体制をより確実にし、作品管理環境の見直しと、作品保護体制の改善を行った。 ・昨年度から行っていた、保存箱の取り替え作業をほぼ完了した。 ・作品の貸し出しについても、保存科学研究所員が貸出担当職員と連携して行うようにし、資料が貸出により劣化することを防いでいる。 	<p>A</p> <p>15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・恒常的努力を要する業務であり、業務体制の改善を評価するが、館の重点事業として対応を強化されたい。 ・保存科学研究所員による定期的な展示室内の環境モニタリングや展示と保存の環境管理が適切に行われ、展示と保存という相矛盾する課題を解決する方向を歩まれている。 ・保存科学研究所員と作品管理担当、貸出担当との協力、連携体制が強化され、作品保護、管理がより効果的に行われている。引き続き、適切な保存環境を維持し、向上するよう努められたい。
		ウ 収蔵作品データ管理の改善を図る。	企画係	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き、収蔵庫の棚卸し作業を進めた。写真収蔵庫については、大部分の作業を終了したが、一部残ったものは、来年度も引き続き、実施する予定である。また、4階の映像収蔵庫についても、年度後半から棚卸しを開始した。 ・棚卸し作業に伴い、収蔵データの点検及び情報付与を実施しており、作品管理体制の改善を図った。 	<p>B</p> <p>16年度=B 15年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地味な仕事であるが逐次改善を図って欲しい。 ・収蔵作品データの点検、情報付与の実施により、作品管理体制の改善が進んでいる。 ・閲覧機能の向上にも積極的に取り組み、データの活用と情報公開を図られたい。

2 展覧会等企画	①来館者数の目標を定め、集客増を図る。	ア 年間観覧者数35万人を超える。	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度は、定量目標を9万人超える41,705人の入館者を記録した(前年比102%)。 東京都からの委託経費が減少傾向にある中で、逆に入館者は平成12年度以来過去最高を6年連続して更新している。 	<p style="text-align: center;">A 15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 写真美術館の継続的な努力の積み重ねが、多くの愛好者を生み出している。 6年間連続して前年実績を上回る入館者を獲得したことは、高く評価すべき。館の活動が利用者にも評価され、定着しているひとつの指標である。 入館者の鑑賞体験の向上と、混雑時の安全で快適な展示空間の確保にも配慮が必要だろう。 現在のキャパシティではまかなえないこと、かつ、新しい施設のビジョンを声高にアピールする時期ではないだろうか。
		イ 新たな顧客を増やすための取り組み(特定層を対象とした企画テーマの選択)を行う。	<p style="text-align: center;">企画係</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な展覧会、上映会を1年を通し企画・実施した。 「恋よりどきどきーコンテンポラリーダンスの感覚展」を開催し、合わせて共催展でもコンテンポラリーダンスの「ローザ展」を開催した。これによりダンスファンという新しい顧客層を開拓した。 「写真展 岡本太郎の視線」では、岡本太郎の写真家としての新たな一面を捕らえたことにより、太郎ファンという新たな来館者層を獲得した。 共催展でも、世界文化遺産写真展「アンコールと生きる」や日本写真家協会展「日本の子供60年」、「ベトナム 不滅の記録 発掘された北の写真展」など特徴のある展示を実施したことにより、特定のファン層にアピールし、そうした人々が新たな来館者層となった。 	<p style="text-align: center;">A 15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> テーマやタイトル、ともに「美術館らしくない」斬新な取り組みを行い、来館者とコミュニケーションを深めていくことは極めて意義深い。 従来の写真展の枠にとらわれない実験的な企画、取り組みも積極的に行い、問題提起することは重要で、古い世代が一部反対したから、新しい試みをためらう必要は無い。大事なのは、若い世代にどれだけ刺激を与えるか、であろう。 新たな利用者を増やすため特定層を対象とした企画テーマを選択するとともに、広報活動も効果的に連動させて、写真美術館に来たことのない人にも情報が届き、足を運んでもらえるようにしたい。また、そうした新規利用者がリピーターとなり、利用者層が広がるよう引き続き努めたい。 写真の素晴らしさを満喫できる展覧会、例えば、ペルーの写真家Martin Chambiの作品は世界中で高く評価されているが日本ではほとんど知られていない。こういう人の個展を開くことも意義があると思う。

<p>②人々が優れた写真・映像作品と出会い、楽しみ、理解する場を提供する。</p>	<p>ア マクロ的視点 ・専門家から一般来館者までが満足できるような十分な調査研究に立脚し、来館者に感動を与え、また来たいと思われる質が高く、有意義な時間が過ごせる展覧会を実施する。収蔵作品を効果的に活用した収蔵展や、話題性がある自主企画展、誘致企画展とを組み合わせ、多様なプログラムミックスを行う。展示を通じ、写真・映像文化の創造発信を行う。 ・10周年記念事業として、コレクションを活用した収蔵・映像展に加え、学芸員の独自調査研究に基づく自主企画展を実施する。</p>	<p>企画係</p> <p>・平成17年度は開館10周年記念特別企画として、収蔵作品だけを活用した「写真はものの見方をどのように変えてきたか展」を、4月2日から11月6日まで開催。第一部「誕生」、第二部「創造」、第三部「再生」、第四部「混沌」として、写真の歴史を独自の切り口で検証し、評価の高い展示が実施できた。図録は担当学芸員が監修し、新潮社より一般向けの書籍4冊を刊行した。 ・「日本・海外の新進作家展 私のいる場所」は3展示室を使い開催。平成14年度から毎年実施している新進作家展の拡大版であり、日本のみならず、海外の新進作家を取り上げ、話題となった。 ・「植田正治 写真の作法展」については、担当学芸員の調査研究と関係者との繋がりにより、より作家の本質に迫る展覧会と評価された。</p>	<p>A</p> <p>15/16年度=A</p>	<p>・「写真はものの見方をどのように変えてきたか展」4部展は、貴重な非常に意義ある展覧会だった。写真の歴史を検証し、紹介するとともに、館のコレクションの広がりや質の高さを伝える、非常に見ごたえのある骨太の企画であった。それぞれのテーマ設定と、4部を通して写真が誕生してから現代に至るまでを館の視点とコレクションによって総括できる展覧会構成は、開館10周年を記念するにふさわしく、館のミッションにかなうものであった。 ・開館10周年特別企画と研究の成果を4冊の書籍として残せたことも、写真・映像文化の中心的役割を担う美術館として大変有意義なことである。人気、集客性のある展覧会だけでなく、このように時間をかけて準備して館のコレクションと研究の成果を活かせるような、東京都写真美術館ならではの企画を今後も長期的視野のもとに行ってほしい。こうした美術館本来の自主企画展を誘致企画展と効果的にバランスよく組み合わせることを今後も期待したい。 ・きわめて地道に長期的計画を立て、問題意識をもって取り組んでいくことは高く評価したい。来館者を待つという受け身の立場から脱して社会に対する発信である。著者の業績にもなるので学芸員の意欲の向上にも連なる。観客にアピールしたことは勿論、調査研究・開催に関わった学芸員が得た自信は大きかったと想像する。働く方々の館に対する愛着心こそ、今後の館の運営に良い影響をもたらす。自主企画、外部共催ともに成功と思う。</p>
---	--	---	---------------------------	--

云等企画

イ ミクロ的視点
個々の展覧会につき、事前に事業計画書を作成し、目標、展示企画内容、広報宣伝方法、収支計画を明確にしなが、集客性があり質の高い展示を行う。また展覧会終了後に事業報告書を作成し、展覧会結果の評価分析を行う。
(具体的指標例)
入場者数とその特性や内訳。アンケート結果による顧客満足度及び要望。展示の見やすさ、分かりやすさ。展示会場のデザイン構成。写真と映像、美術品とのコラボレーション。展示会場でのフロアレクチャーの実施。シンポジウム、ワークショップ等関連事業の開催。新たなファン層の獲得。

企画係

- ・全ての主催展覧会に於いて、事前の「事業計画書」の提出と説明、事後の「事業報告書」の提出と説明を実施し、各事業について評価と総括を行った。
- ・キャプション(文字)を大きくすることや、位置を読みやすい場所にするのを心がけた。
- ・10周年記念展に加え、「ナチュラルスト田淵行男の世界展」、「超ヴィジュアル展」「ブラッサイ展」「恋よりどきどき～展」「写真展 岡本太郎の視線」等の多彩な企画展や、「日本の子供60年」、「ベトナム 不滅の記録 発掘された北の写真展」等の骨太な共催展が競合した結果、入館者の増加につながった。
- ・展示室での担当学芸員や作家のフロアレクチャーを多数実施した。
- ・10周年記念として、展覧会との連携行事で文化トークライブを3本(世界遺産、写真の歴史、文化の日記念)、年末に植田正治展のシンポジウム等実施、毎回、立ち見がでるほどの盛況であった。

A

15/16年度=A

- ・他の美術館と比較しても、先進的と評価できる真摯な取り組みである。
- ・全て、事前の「事業計画書」と、展覧会後の「事業報告書」を提出、説明し、企画内容とともに収支計画や広報戦略などもよく考慮され、結果についても評価分析されている。これを蓄積し、課題や反省点、成功のポイントやアンケート結果、来館者の声を後の展覧会に効果的に活かし、役立てるようにしたい。
- ・入場者数とアンケート結果はひとつの指標とはなるが、アンケートに表れない評価も考慮したい。例えば、専門誌や新聞、雑誌などの展覧会評など、専門家の評価も分析されているのだろうか。
- ・特に「恋よりどきどき～展」などは、展覧会と連携したイベント、パフォーマンス+トーク、特別上映会やフォーラムなど非常に充実していた。フロアレクチャーやシンポジウムなど関連企画によって、展覧会への理解と興味を深める努力を継続して欲しい。

2 展覧会等企画

③ホールにおいて、良質の映画を誘致し上映する。

ア 実験劇場として、他の映画館と差別化を図り、写真や美術をテーマとしたものを含め、芸術性が高く良質な映画を上映する。

管理係 / 普及係

- ・当館ホールを使用した「写真美術館で観る映画シリーズ」として単館ロードショー館として5年目を迎えた。(入場者数は55,199人(対前年比94%)であった。)
- ・平成17年度は「村の写真集」「ロッセ・ライニガーの世界」「ガラスの使徒」など、9本の映画を上映したほか、10周年記念として展覧会と連動した文化トークライブやシンポジウムを多数実施した。
- ・特に当館にもその作品が収蔵されている、世界最古の切り絵アニメーション「ロッセ・ライニガーの世界」は、NHKの全国ネットでも紹介され、多大な反響を得た。
- ・愛知万博記念チェコ映画祭や東京都アニメアワード、東京国際映画祭協賛ショートショートフィルムフェスティバルアジアなど、特色ある映画フェアを展開した。

B

15/16年度=A

- ・当初は実験劇場に相応しく画期的な取組として高く評価されてきた。今後は展覧会企画と映画とのあり方を判りやすく説明できるようにすべきではないか。美術館の他の事業と比較して、館のスタッフの関わり(調査研究など)が薄いように思う。
- ・外部で話題性のある映画を上映するところが増えてきている。競合的になる可能性はあるが、継続したい。
- ・他では目にするできないユニークなラインナップであり、一般、及び専門家の方の評価も高い。
- ・写真・映像文化の普及、教育、創造につながるような、良質な映画を提供していくことで、「写真美術館で観る映画シリーズ」がより認知されるとよいだろう。

<p>3 普及 事業</p>	<p>①写真と映像を通して広く都民を対象とする生涯学習に貢献し、写真映像文化や当館の美術館活動について、入門的または専門的な関心を高めていくための教育普及事業を実施する。</p>	<p>ア ワークショップ 写真・映像文化により深く興味を持ってもらうために、多くの人が参加可能な美術鑑賞、実技体験のためのプログラムを提供する。</p>	<p>普及 係</p> <p>実施回数 23事業 47コース(延べ37日間)参加人数 延べ810人 ①実技ワークショップ、27コース実施。 ・プリントワークショップ(B&W、フィルム現像+BW、フォトグラム、ソラリゼーション) ・古典技法(アルビュルマン・プリント、ブロムオイル) ・撮影ワークショップ(植田正治展) ②子ども・親子ワークショップ(小学生対象)を5コース実施。 ・フォトグラム、コマ撮りアニメーション ③カフェ+ギャラリートークを実施。 ・カフェ+ギャラリートークは、2階のカフェに於いて作家や研究者、学芸員等が企画、作品等について解説した後展示を鑑賞するもので、双方から好評であった。 ・10周年コレクション展各担当学芸員、「田淵行男展」田淵穂高、水越武、「ブラッサイ展」アラン・サヤグ、今橋映子、第3部「再生」展牧野守、第4部「混沌」展オノデラユキ、「ダンス展」ニブロール、「岡本太郎展」山下裕二、「植田正治展」ガブリエル・ボーレ、「新進作家展VOL.4」出品作家8名</p>	<p>A</p> <p>15/16年度=A</p>	<p>・手間のかかる文化普及事業を高頻度できちんとこなしている取り組みへの熱意を高く評価する。 ・実技体験プログラムから、子供・親子で参加できるワークショップ、展覧会と連携したカフェ+ギャラリートークといった教育普及事業を展開し、学び、鑑賞を深める機会を提供している。 ・カフェ+ギャラリートークはカフェと展示スペースを効果的に使い、作品を見ながら作家や研究者、学芸員などによる解説を直接聞ける魅力的なプログラムとなっている。引き続き、充実したプログラムを提供してほしい。</p>
	<p>①写真と映像を通して広く都民を対象とする生涯学習に貢献し、写真映像文化や当館の美術館活動について、入門的または専門的な関心を高めていくための教育普及事業を実施する。</p>	<p>イ スクールプログラム 未来の文化創造を担う児童・生徒を対象に、学校の授業と連携した教育プログラムを実施する。プログラム・教材の充実を図る。</p>	<p>・当館10周年コレクション展を展覧会鑑賞プログラムの中心とし、学校側に呼びかけを行った。 実施回数:42事業(36校、教職員研修2件、NPO団体等3件) 54回実施 (学校数の前年度比133%、実施回数の前年度比135%) 年間受講生徒数:延べ1,102人(前年度比84.5%) 年間参加ボランティア・スタッフ数:延べ85人 ・出前授業校/施設数:5件、実施回数:6回</p>	<p>A</p> <p>15/16年度=A</p>	<p>・学校教育の問題が山積している現在、このような活動はますます意義が有り、持続が大事であり、重要な事業として評価する。 ・10周年記念のコレクション展を効果的に活用し、写真の歴史と写真美術館のコレクションについて紹介、鑑賞したスクール・プログラムは、実施校、実施回数もさらに増え、学校側や参加者からも評価されていることが伺える。 ・館の活動への理解や作品への興味へとつながり、かつ学校の授業とうまく連携するよう、引き続きプログラムと教材の開発、充実に努力されたい。要望に応じるだけでなく、積極的なアウトリーチ活動をされている点、評価したい。 ・館のホームページでもスクールプログラムについてわかりやすく紹介されている。</p>

3 普及事業	<p>②写真・映像文化の向上を図るため、写真に関する図書、情報の収集と公開を行う。</p>	<p>ア 写真・映像の専門的視点から新たな図書、資料を収集し、閲覧、情報提供を行い、図書室の利用者増を図る。また、図書資料のインターネット検索システムの導入を図る。</p>	<p>普及係</p> <p>図書閲覧室利用者数(延) 27, 971人 図書閲覧点数 13, 999冊 閉架書庫 収集図書点数 967冊</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターネットで蔵書検索できるシステム(W ebOPAC)を導入し、利用者サービスの拡充を図った。(アクセス件数:1日平均166件) ・展覧会との連携を考えた写真集の特集展示コーナー(「写真はものの見方をどのように変えてきたか:第1部～第4部」展や「ブラッサイ展」、「植田正治:写真の作法展」等々を開設した。 	<p>A</p> <p>15/16年度=B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地味であるが、逐次、機能を強化し、WebOPACの導入で利用者の利便性が飛躍的に向上した。 ・「美術図書館横断検索」からも検索できるようになったのはよいが、雑誌も検索できるようになるとなお便利だろう。 ・特集展示コーナーを設けるなど展覧会との連携も大変いい試みである。
3 普及事業	<p>③外部の協力により、普及事業の活性化を図る。</p>	<p>ア ワークショップ等にボランティアやNPO団体と連携し、多様な市民に支えられた美術館としていく。</p>	<p>ボランティア活用事業 実施回数43回 延べ参加者146人 (年間一人あたり平均3,04回) (参考 16年度 56事業 延べ288人が参加 平均6,86回、 15年度 31事業 延べ132人が参加 平均4,13回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ14事業 延べ20日 ・スクールプログラム19事業(15校)19回 ・その他2事業 渋谷区民まつり ・図書室整理 <p>NPOとの連携 杉並区立科学館「子供フェスティバル」においてフォトグラム、カメラオブスクラの出前授業を行った</p>	<p>B</p> <p>16年度=A 15年度=B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今後さらに拡充する教育普及事業などを支え、発展させるためにも、平日対応可能なボランティアの受入(増員)とスキルアップを検討すべきであろう。 ・ボランティアにとっても館にとっても望ましいかたちで、ボランティアの組織化、育成、活用をひきつづき進めることが期待される。 ・年間一人当たりの参加回数が減少してきているので今後ともボランティアの活用に一段の努力をされたい。 ・ボランティアの導入を課題とする館が多いなか、当館ではこの活動がすっかり定着してきている。
3 普及事業	<p>③外部の協力により、普及事業の活性化を図る。</p>	<p>イ ボランティアが活躍できる機会を拡充するための研修を行い、ボランティア側の満足度も高い事業とする。</p>	<p>下記の研修会(5回)・懇談会(3回)を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古典技法研修会 ＜平成17年4月23日,24日＞6人 ・リーダー研修会 ＜平成17年5月4日＞9人 ・新規研修会 ＜平成17年5月11日、5月28日＞15人 ・リーダー研修会 ＜平成17年11月19日＞1人 ・フィルム現像研修会 ＜平成18年2月25日＞5人 ・懇談会 ＜平成17年5月11日＞21人、 ＜平成17年11月19日＞12人、 ＜平成18年2月25日＞12人 	<p>A</p> <p>16年度=B 15年度は項目なし</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアが学び、写真の技法や写真美術館について理解を深め、スキルアップする機会が十分に提供されている。 ・積極的に館でのボランティア活動に参加し、満足してもらえるよう配慮されている。 ・研修を行うスタッフ不足から継続性のある研修が難しければ、研修会を映像として記録するのはいかがか。

4 広報・宣伝	①存在感のある美術館としていくため、効果的な広報・宣伝を行う。	普及係	<p>ア 個別の展覧会企画に、マスコミ等との共催・後援を行い、効果的な広報を行う。</p>	<p>・自主企画展については、展覧会毎にメディア共催の可能性を積極的に探り、依頼することにより、当館主催のほとんどの企画がマスコミとの共催扱いとなった。 ・10周年記念の広報特別計画として10周年特別予算を活用した新聞広告を掲載した。</p>	<p>A</p> <p>15/16年度=B</p>	<p>・スポンサーであるメディア側から見ても魅力的な企画になっている。 ・新聞等での記事掲載、展覧会情報の告知で露出する機会を増やす努力が行われている。 ・企画内容や広報戦略によって適切な共催相手を検討し、展覧会ごとにメディアと共催する意義や費用対効果を考慮する。</p>
			<p>イ 近隣文化施設と連携した「あ・ら・かるちやー渋谷・恵比寿・原宿」協議会の事務局として、参加各館の調整を行いながら広報宣伝活動を行い、相乗効果を発揮する。</p>	<p>* 運営協議会の開催 参加館の担当者が集まり、連携事業についての協議や情報交換する会議を延べ8回行った。 * 広報宣伝 ・参加館の所在やアクセス方法等を周知する広報用チラシ「かるちやー散歩地図」を発行した。 ・11月に「あ・ら・かるちやー」ホームページを立ち上げ、参加館の紹介をするとともに、各施設のホームページにリンクを貼り、相互PRを行った。 * 連携事業・イベント ・11月3日(木・祝)・4日(金)に渋谷区民まつり「ふるさと渋谷フェスティバル」に参加。 ・広報用チラシの配布や、「あ・ら・かるちやークイズ」やワークショップ(「ソーマトロープ」、「型紙を使って小紋に挑戦」)等を実施。 ・YGPと麦酒記念館と協力し、11月3日(木・祝)に当館1階ホールで福原義春館長と磯村尚徳氏の文化トークライブを行った。</p>	<p>A</p> <p>16年度=A 15年度は項目なし</p>	<p>・地域連携は必要であり、細やかな気配りが感じられて評価できる。おざなりでない、利用者を意識した取り組みが良い。 ・事務局として、前年よりさらに発展させ、広報宣伝や連携事業で協力の成果を上げている。今後も近隣文化施設と相乗効果をあげるような連携のあり方を考え、地域の文化活動を盛り上げ、リードすることを期待したい。 ・常に広報の機会が考えられるので、こまめに努力を続けられたい。</p>
			<p>ウ 当館主催の展覧会に分かりやすいタイトルをつけ、明確なコンセプトの伝達を行う。</p>	<p>展覧会タイトルは、担当学芸員が案を出し、展覧会事業計画等の検討の際、幹部会、学芸ミーティング、また館内で協議し、一般の人にとってより展覧会内容がわかりやすくなるように心がけた。</p>	<p>A</p> <p>16年度=A 15年度=B</p>	<p>・展覧会のコンセプトをうまく伝え、わかりやすく示すようタイトルのつけ方に配慮が見られ、「美術館らしくない」タイトルにセンスの良さを感じる。 ・展覧会の内容と合ったタイトルとイメージを組み合わせて、効果的に伝え、展覧会にひきつける工夫が継続して求められる。 ・館長も自らタイトルづけに積極的に参加しており、タイトルを如何に重要視しているかが判る。</p>

4 広報・宣伝	<p>①存在感のある美術館としていくため、効果的な広報・宣伝を行う。</p>	<p>エ マスコミとの日常的な接触を行うとともに、懇談会等を企画し、館からメッセージを発信する。</p>	普及係	<p>A 15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・少し意外性のある広報はやはり効果的で、確実に成果が上がったことを評価する。 ・他の美術館にもそのノウハウを伝授するようなワークショップを開催してはいかがか。貴重な経験の積み重ねをされていると思う。 ・4部展で、特に重点的に記者発表、プレスギャラリートourを行い、工夫したユニークなプレスリリースを発送して、多くの媒体で紹介される結果に結びついている。館にとって重要な特別企画展がきちんととりあげられ、評価できる。 ・記者懇談会では、館の運営方針、事業計画などを報告し、館のメッセージを直接発信している点でも、開かれた美術館となっていて評価できる。
4 広報事業	<p>②インターネット等新たな技術を用いた情報発信を行う。</p>	<p>ア ホームページの内容を随時改正し、魅力的で使い易いものとし、前年度よりもさらにアクセス件数増を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・より利用しやすい画面構成とするためのマイナーチェンジを度々行い、年間アクセス件数は546万PVで、平均は45万超PVとなつて、16年度を23%上回つた。 ・「写真の歴史展第3部「再生」」で、検索キーワード広告を出稿し、展覧会の周知を図るとともに、アクセス増加に効果があつた。 ・展覧会情報の他、10周年特集コーナーや書籍「写真の歴史入門」のバナーを掲載し、年間を通じて10周年の特別感を演出した。 	<p>A 15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アクセス件数が年間23%も上がったことは素晴らしい。HPの内容によるだけでなく、写真美術館全体が注目を集めている証左である。 ・情報収集の手段が圧倒的にウェブになってきている昨今、適切な対応をされているが、さらに継続的な努力を期待する。 ・情報量が多く内容も充実していて、かつ使いやすく、操作性・デザイン性ともに優れたサイトとなっている。美術館の中でも、充実し、魅力的なホームページとして他館をリードしていると思う。図書検索も加わって、研究者や学生、専門家にもより便利なページとなった。随時更新もされているので、アクセス件数も伸びている。 ・全体的に少し面白みに欠ける印象がある。フォントの種類、濃淡、サイズなどで更にイメージ改善が図れそうな気がする。

5 調査研究	①写真と映像に関する幅広い研究を行い、今後の美術館活動に資するとともに、学術的面で貢献を図る。	ア 恒常的に展覧会調査、収蔵作品調査を行うとともに、10周年記念コレクション展に関連した調査発表を行う。 また、保存科学研究では、作品に対する保存措置の研究、調査データの提供及び大学等との共同研究を推進する。	企画係 ・10周年記念特別企画展「写真はものの見方をどのように変えてきたか」4部展のカタログ的な出版物として新潮社から刊行された書籍の執筆は、改めて写真美術館学芸員にとって自分たちのコレクションを再確認し、研究を行う場ともなった。 ・江戸城写真帳の調査を開始。スキャナーを購入し、実施方法について、江戸東京博物館と協議を行った。 ・写真の保存科学について千葉大学との共同研究を実施し、「写真の長期保存における薫蒸処理の影響」を日本写真学会と文化財修復学会に発表 ・当館1階ホールにて、画像保存セミナーを開催した。	A 15/16年度=A	・新潮社刊行「とんぼの本」シリーズ「写真の歴史」4部作は、収蔵作品調査や写真研究の成果を広く発表し、写真文化の研究と普及に貢献している。これは、日常業務や展覧会準備に追われる中、努力してこれだけの成果を出した学芸員を高く評価すべき。 ・保存科学研究においても、大学との共同研究を実施し、学会に発表するなど、文化を共有するための他機関との共同研究・作業は大事である。 ・紀要は館員各自の業績のアーカイブとなるので毎年の出版を望む。 ・調査・研究は、美術館の根幹の活動として重要である。
6 サービス戦略	①美術館で豊かなひと時を過ごしていただけるよう、来館者に親切なもてなしを行い、良質なサービスを提供する。	ア 来館者が「また来たい」と思うような温かい接遇が受けられるよう職員、スタッフを育成する。	・17年度運営コンセプトである「信頼される美術館」の趣旨に鑑み、質の高い運営を心がけ、過去最高の入場者数となった。 ・17年度から、看視も受付と同じ会社が受託、看視員と受付との連携がより円滑になった。 ・受付・看視、警備・設備、清掃等の委託スタッフとの月例連絡会も2年目に入り、館職員、スタッフともに連携が良好に機能し、日々の運営に効果をもたらしている。(例:展覧会のオリエンテーション、内覧会、ギャラリートークまたワークショップ等の周知や運営の改善等) ・代表電話の時間別調査を行い、集中する時間帯に1ポストをつけ、サービス向上を図った。 ・17年度から新たに看視日報を作成することとし、係長以上に回覧、現場の状況を把握しながら、問題点の改善を心がけた。	A 16年度=A 15年度=B	・委託スタッフとの月例連絡会を設け、館職員と現場スタッフとの情報の共有ができ、連携して、よりよいサービスの提供と運営のために協力できている。 ・受付や看視日報の作成、回覧により、現場の状況をふまえた上で対策、改善策が考えられ、接遇の向上が図られている。 ・内部の連携がよく行われていることは、館に出入りして、よく感じる。 ・この点の努力はとて高く評価する。他の美術館や博物館にもぜひ知って欲しい。
		イ 顧客アンケート調査を実施し、ニーズの把握を行い、事業の改善を図る。	・一般的なアンケート(常時)及び展覧会ごとにアンケートを実施している。 ・アンケートは館全体に回覧し、意見・注文等にはできるところから対応を心がけている。 ・顧客満足度調査として財団事務局の協力を得て、12月に入館者の全量調査、1月に出口アンケート調査を行い、今後の基礎資料とした。	A 15/16年度=B	・他の館に先駆けて、丁寧な調査を行っており、対応の早さは以前から印象に残っている。 ・通常の展覧会ごとのアンケート以外に、顧客満足度調査として入館者の全量調査や出口アンケート調査を実施したことは、利用者全体をより把握するためにも重要である。その結果をきちんと分析し、今後の館の運営、サービスに活かしていくことを期待する。

6 サー ビス 戦 略	①美術館で豊かなひと時を過ごしていただけるよう、来館者に親切なもてなしを行い、良質なサービスを提供する。	ウ 運営全般につき、顧客ニーズや社会状況に沿うようサービスのあり方の改善を加える。	管理係 ・正月開館は3年目を数え、恵比寿ガーデンプレイス内でも定着してきた。ヘブン・アーティストは、チェロとチェンバロのコンサートを2階エントランスで開催した。 ・年末開館(12月28日)では、1階ホールで植田正治:写真の世界展のシンポジウムを開催し、好評を博した。 *平成16年;年始実績 =6347人 *平成17年;年末年始実績=2259人 *平成18年;年末年始実績=6198人	B 16年度=A 15年度=B	・文化施設の正月開館が一般的になりつつある。当初は開館する努力に意義があったが、今後は来館者のニーズを検討してどのような企画(正月無料開館など)を提供するかが課題であろう。 ・正月開館以外にも、常に利用者のニーズや利用状況、社会状況、館のミッションを考え合わせ、写真美術館独自のサービスのあり方を考え、改善することが期待される。
		エ 館内外のサイン計画の改善を図り、分かりやすく、デザイン性の高いものにしていく。	・館内のサインについては、総合受付やエレベーター内等常時見直しを行っている。 ・アンケートでも、アクセスがわかりにくいという声があり、恵比寿駅、恵比寿ガーデンプレイスとも、引き続き協議を行い、わかりやすい館外サイン計画を検討していく。	B 16年度=B 15年度=A	・恵比寿駅に後ろを向けている印象をどう改善していくか、十分な努力をされているが、今後ともより具体的な取組を必要としている。 ・何度も写真美術館を利用しているリピーターにとっては問題ないが、初めて来館する利用者にもわかりやすい館内外のサイン計画、アクセスの判りやすい案内のため、引き続き検討、改善が必要である。 ・日本語以外の表示もぜひ検討して欲しい。
		オ 来館者の憩いのスペースとして1階と2階のカフェを効果的に運営しサービスの充実を図りながら、利用者増を図る。	・お客さまのニーズに応え、1階カフェは日曜日を除く毎日、午後8時まで営業時間を延長した。 ・10周年企画の各展覧会でアーティスト&カフェ・トークと題したユニークな展覧会鑑賞プログラムは2階カフェの新たな活用策となった。	A 16年度=A 15年度=B	・アーティスト&カフェ・トークなどは評判の良い企画で参加者に喜ばれているが、やっぴいことをもっと広報するなど充実したい。 ・1階カフェの営業時間延長や展覧会鑑賞プログラムにおける活用など、1階と2階のカフェの効果的な運営が行われているが、2階カフェの運営は、まだまだ工夫すべき余地がある。
7 経 営 改 善	①館の運営について外部より参加できるようにし、開かれた館運営を行う。	ア 館運営に関し、一般来館者等に十分広報し開かれた施設としていく。	・看視スタッフによる日報を回覧、アンケートだけでなく利用者の声を把握し、きめ細かな対応策を講じた。 ・年報発行も2年目となり、ビジュアル的にも写真の掲出を増やすなど見栄えの良い、わかりやすいものとして改善を加え、全国の美術館・博物館へ配布した。	A 16年度=B 15年度=A	・きめ細かい対応が今後のサービス向上につながると思われる。 ・年報もその年の館の活動、運営の実績を写真やデータを用いてわかりやすくまとめて記録し、公開している。 ・ホームページ上でも公開し、PDFファイルで年報を見られるようにしたことによって、より目標が達成されている。
		イ 開かれた運営のため、展示企画内容について企画諮問委員の意見を聞くための会議を開催し、企画に反映していく。	・企画諮問会議は、年度内2回(7月・3月)開催し、18年度及び19年度展覧会企画提案について諮問を行った。 ・委員からの貴重なご意見は、展覧会企画等に反映させている。	A 16年度=A 15年度=B	・真摯な取り組みとして評価できる。 ・企画諮問会議により、展覧会企画案について外部の専門家の意見もとりいれ、開かれた運営が行われている。 ・例えばどのような意見が出て、それがどのように役立ったかを知りたい。

7 経営改善	①館の運営について外部より参加できるようにし、開かれた館運営を行う。	管理係	<ul style="list-style-type: none"> 平成15年度事業の評定結果を踏まえ、係長会等で改善案(HPのリニューアル、2階カフェの活用策等)を提案、事業に反映させた。 平成16年度事業の内部評価を行い、引き続き、外部評価委員会を3回(9, 11, 3月)開催、評価をいただいた。 10周年を契機として、外部評価委員のご意見を伺いながら、館のミッションを改めて確立した。 	<p>A</p> <p>16年度=B</p> <p>15年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 課題を認識し、真摯に取り組んで問題点の改善を行っている点、評価。 内部評価と外部評価ともに館の事業、運営の向上に活かされている。 開館10周年を迎え、館のミッションに改めて向き合い、外部評価委員を活用しつつ、ミッションの改定が行われ、館がめざす方向を明らかにしたことは高く評価できる。が、ミッションをいかに館の活動、運営に今後活かしていくかが重要である。 今年で3年目の外部評価であるが、大分軌道に乗ってきたという実感がある。今後の展開はどうするか。
	②予算削減の中で、必要な資金の確保を行う。	パートナー推進係	<ul style="list-style-type: none"> 17年度当初の維持会員数は142社、友の会員数は1441人であったが、維持会員担当を中心に学芸員の協力も得て参加拡大図り、維持会員数は年度末で173社となった。(維持会費5,790万円) 友の会員数は1700人と増加した。 	<p>A</p> <p>15/16年度=A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 大きな成果である。どこも会員数を増やすことに苦勞しているなか、快挙。 維持会員の特典や会費の主な使途を明確にし、目標を超える173社の維持会員数を達成し、より多くの幅広い企業・団体からの支援を獲得した。 国や都に対して税制改革の必要を訴えるのは難しすぎるか。
	イ 企業・団体に協賛、協力を依頼し、財政的支援の増強により個別展覧会の効果的運営を行う。また、10周年協賛を募る。 ウ リピーター獲得を主眼とし、当館のサポーターとしても支援頂く友の会制度を拡充していく。(会員数1700人目標)	パートナー推進係	<ul style="list-style-type: none"> 17年度協賛金収入 7件6,244千円 10周年記念のための特別協賛金を特に写真関連企業等に募った結果、10件8,300千円の資金協力を得られ、10周年記念展等に充当することができた。 田淵展、ダンス展、岡本太郎展等をはじめとして多くの展覧会で、ポスター・チラシ・図録等の印刷協力や機材提供等、協力・協賛を受け成果を上げた。 	<p>A</p> <p>16年度=A</p> <p>15年度=B</p>	<ul style="list-style-type: none"> 努力の成果であり、評価できる。この時代、厳しい状況のなか、大いに健闘されていることを評価。 特に10周年記念のための特別協賛を募り、記念展等のための資金協力を得ている。その他企業、団体からの資金協力や技術、機材提供などの協力を得て、展覧会などの運営に効果的に活かしている。友の会員数も伸びている。 国や都に対して税制改革の必要を訴えるのは難しすぎるか。
③適切な施設管理を行う。	管理係	<ul style="list-style-type: none"> スタッフ連絡会での受付やアンケートに応え、2階のコインロッカーを3台(30個)、来館者が多い1階西側風除室に移設し、利用者のニーズに対応した。 梅雨時期の傘の管理(1階に傘立てを増設)など、きめ細かに来館者サービスにつとめた。 清掃や空調等の管理は、常時、中央監視室でチェックを行い、適正な環境の確保につとめた。 適正な作品維持管理の知識と運用がスタッフ(特に看視員、受付)にも理解されるようにつとめた。 	<p>A</p> <p>15/16年度=B</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地道な努力が続いていること、現実的な対応ができていることを評価。 作品維持管理のためにも、利用者のためにも、適切で良好な環境管理が図られている。細かな改良の継続が実感できるなど、必要な情報収集と、知識の共有が行われている。 	

<p>③適切な施設管理を行う。</p>	<p>イ 火災や地震等予期せぬ災害に対する準備を周到に行う。</p>	<p>・7月22日(水)9:30前後、開館前に、3階～4階への階段天井部材が落下する事故が生じた(発見者、巡回時の警備員)。 結果として、原因究明及び改修工事等3ヶ月以上の長きにわたった。警備・設備又清掃等のスタッフやYGPの協力を得ながら初期対応を図り、来館者の安全を最優先に復旧につとめた。 ・これまで、YGPでの合同避難訓練に参加してきたが、当館独自で10月に避難訓練を実施した。 当日は職員、警備や受付等委託スタッフまた、ミュージアム・ショップやカフェの店員も全員参加した。 渋谷消防署の救急隊員の指示により消火器訓練や除細動器AED訓練を受けた。</p>	<p>B 16年度=B 15年度は項目なし</p>	<p>・事故発生後の迅速な対応は評価するが、油断することなく、今後も見回り強化、安全対策について継続的な取り組みが望まれる。 ・来館者と職員、スタッフの安全確保はもちろん、収蔵作品の安全保護対策を強化したい。 ・館独自の避難訓練は絶対必要であり、職員、委託スタッフやショップやカフェの店員全員が参加して、避難訓練を実施したことは大きな前進である。引き続き、館としての災害対策、危機管理には力を入れることが望まれる。 ・耐震構造上の問題はないだろうが、定期点検を怠らないようにしていただきたい。</p>
<p>7 経営改善</p>	<p>ア 事務のIT化を可能な限り推進する。</p>	<p>・個人情報保護法の施行を受け、ネットワークも無線ランから有線ランへと変更しセキュリティ対策等強化を図った。</p>	<p>A 16年度=A 15年度=B</p>	<p>・IT化を推進すると同時に、個人情報保護や、情報のセキュリティには常に注意し、最新の対策で管理、保護する必要がある。 ・適切で責任ある対応は評価。</p>
<p>④業務の効率性の推進を測る。</p>	<p>イ 資料等の削減を図り、良好な執務環境を創出する。</p>	<p>・「混ぜればゴミ、分ければ資源」を呼びかけ、分別収集を心がけた。 ・情報提供等はかなり、IT化し、ペーパーレスを推進した。</p>	<p>A 15/16年度=B</p>	<p>・当たり前でいて、なかなかできない館が多いなか、適切な対応である。 ・紙資源を使った資料などの削減と、分別、リサイクルが推進された。</p>
	<p>ウ 効率的執務を心がけ超過勤務時間の短縮化を図る。</p>	<p>・月例の全体会の都度、超勤の短縮を呼びかけた。この際、当館の機械警備システムも説明(午後11時に起動するが、勤務者がいるとセットできず、警備員の超勤となり、委託経費の増加につながる)したところ、削減に寄与した。 ・係長会で超勤の短縮を話し合い、特に非常勤職員への対応等検討した。</p>	<p>B 15/16年度=B</p>	<p>・研究職全般で課題となる問題であり、効率化で生ずる矛盾にどう対応していくかが課題。今後とも継続的な取り組みを期待する。 ・非常勤職員であっても、実際の仕事量は常勤並みにあったとしたら、特に展覧会前などの繁忙期には超過勤務しないと回らない状況もあり得る。超過勤務の短縮を呼びかけるだけでは根本的な解決にはならない。たとえ効率的執務を心がけても、人手が足りなかったり、仕事量が膨大にあれば、超過勤務をせざるを得ない状況も生まれる。 ・超勤の短縮化を図る以前に仕事の分配と人員の配置、職員の雇用形態(常勤や非常勤など)の見直しが必要なのではないか。そこまで踏み込んで検討され、対策を考えること。</p>